雪椿通信

2022

vol. 55

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

難波田龍起〈森の詩〉1960年

三沢厚彦 ANIMALS IN NAGAOKA

三沢厚彦〈Animal 2008-02〉
2008年　檜、油彩　撮影／内田芳孝

2年越しの開催となる「三沢厚彦　ANIMALS IN NAGAOKA」が、この夏いよいよ新潟県立近代美術館にやってきます。

現代を代表する彫刻家、三沢厚彦（1961- ）。彼が2000年から手がけている代表的シリーズが、動物の姿を等身大に彫り出した木彫作品「ANIMALS（アニマルズ）」です。本展ではイヌやネコといった身近な動物から、ゾウやクマ、さらには空想上の生き物まで、実に様々なANIMALSが登場します。

一見、親しみやすい雰囲気でありながら、掴み所のない不思議な雰囲気も併せ持つANIMALS。よく知った動物の姿をしているようで、どこか違うような印象を与え、見る者を惹き付けます。

「動物はみんなが知っているモチーフであると同時にその不可解さもはかりしれないものがありそこが面白い」と、動物の魅力について語る三沢。ANIMALSのモチーフは多岐に渡りますが、いずれも実際の動物を写実的に表現しようとはしていません。三沢は自身の頭の中にある動物のその動物“らしさ”を背景に、何度もドローイングを重ね、素材と向き合う中でイメージを具現化していきます。そのイメージはやがて等身大というかたちをまとい、圧倒的な存在感を持って現出します。

三沢厚彦〈Animal 2017-02〉
2017年 檜、油彩　撮影／三沢厚彦
会場／富山県美術館

三沢の捉える動物の「リアリティ」が独自の表現で形づくられたANIMALSは、我々がよく知るモチーフであるからこそ、強烈な印象を放ちます。人々が持つ多様な動物のイメージに、ときに共鳴し、ときに反発し、見る人の心を揺さぶる力強さ。それがANIMALSの大きな魅力と言えるのではないでしょうか。

ANIMALSの素材となるのが、樟という木材です。独特の芳香を放ち、飛鳥仏などにも用いられてきました。三沢は大型作品の制作を製材所内のアトリエで行っています。動物の多様な姿にあわせて寄木をし、墨で下描きを入れて電動チェーンソー等で大まかな形を彫り出していきます。その後の細かい部分は、鑿や彫刻刀を使って、彫り進めていきます。着彩は油絵具で行われ、鑿跡と合わさり、特徴的な質感を生み出します。着彩後に、また彫り進めることもあり、納得がいくまで作業を繰り返していきます。その制作スタイルはどこか絵画的でもあります。

彫刻をつくる一方で、三沢は《Painting》と名付けた絵画作品も多数手がけています。これらの作品は単に彫刻の下絵というものでなく、独立した作品として完結しており、ANIMALSシリーズにおいて欠かせない要素となっています。絵を描く行為と木を彫る行為を、ゆるやかに行き来しながらイメージを膨らませていく、三沢の制作の様子がうかがえる、絵画作品にも注目です。

今回のメインビジュアルになっている《Animal 2020-03》（キメラ）は、三沢が1年以上の歳月をかけて完成させた大作です。2009年のユニコーン以降、三沢はペガサスや麒麟など想像上の生き物の制作にも挑戦してきました。キメラは様々な動物の要素が一つの身体に共存する、ギリシャ神話に登場する怪物です。三沢の作るキメラは、頭部はライオン、身体はヒョウ柄、尻尾は蛇で、大きな翼を持ち、その両翼の間に妖怪アマビエの姿を背負っています。

様々な要素や思考が、同じ空気を吸い、共存している――「共生」ともいうべき本作のテーマは、様々な価値観の変換期を生きる我々に問いを投げかけます。未来を切り開くパワーを放つ巨大な幻獣の迫力を、ぜひ会場で感じ取って欲しいと思います。

作品と展示空間との関係性を重視し、会場ごとに異なる展示プランを展開してきたANIMALS展。およそ100点の彫刻や絵画を、新潟県立近代美術館ならではのプランでご紹介します。魅力あふれる三沢厚彦の作品世界に、ご期待ください。

（主任学芸員 伊澤朋美）

三沢厚彦〈Animal 2020-03〉
2020年 檜、油彩　撮影／三沢厚彦
会場／あべのハルカス美術館

三沢厚彦〈Painting 2022-03〉
2022年 パネル、アクリル　撮影／三沢厚彦

三沢厚彦　（1961-　）

京都府生まれ。幼い頃から京都や奈良の仏像に親しむ中で、木彫の魅力に惹かれ、彫刻家を志す。高校、大学と彫刻科で学び、東京藝術大学大学院を修了。若いころからロックやポップミュージックにも親しみ、音楽に対する造詣も深い。2000年から「ANIMALS」シリーズの制作を開始。同年より西村画廊（東京）で個展を開催。2007-08年、平塚市美術館など全国5館で巡回し以降各地の美術館で個展を開催。主な受賞歴に2001年第20回平櫛田中賞、2019年第41回中原悌二郎賞。現在、武蔵野美術大学造形学部彫刻学科特任教授。神奈川県在住。

三沢厚彦〈Cat 2010-04〉
2010年 檜、油彩
撮影／三沢厚彦

企画展　「三沢厚彦　ANIMALS IN NAGAOKA」
7月16日（土）～9月25日（日）

同時開催　第2期コレクション展
6月28日（火）～9 月25日（日）
［展示室1・2］親と子のワクワク美術館　いきいき！生き物
―近代美術館の動物たち
※7/16から一部三沢厚彦展関連展示になります。

© Atsuhiko Misawa, Courtesy of Nishimura Gallery

2022年度の展覧会から

まずは企画展を二つご紹介します。**「平等院鳳凰堂と浄土院　その美と信仰」**（4/23-6/5）では、京都府宇治市の名刹・平等院に伝わる貴重な寺宝の数々や復元模写・模造等を展示します。国宝《雲中供養菩薩像》（前・後期２軀ずつ展示）が寺外で公開される貴重な機会です。**「ダリ版画展」**（10/8-12/4）では、“20世紀最大の奇才 ”と呼ばれ、シュルレアリスム（超現実主義）を代表するスペインの画家サルバドール・ダリ（1904-89）の奇想天外な版画作品をご覧いただきます。

続いては、当館の多彩な所蔵品を紹介するコレクション展です。「平等院鳳凰堂と浄土院」と同時開催の第１期（3/29-6/19）には、人間の肉体をテーマにした絵画・彫刻を集める**「人体・肉体の表現を見る。」**。旧寺泊町にあった相澤美術館のコレクションから、**北川民次**（前期：3/29-5/15）と**靉嘔**（後期：5/17-6/19）の特集展示もあります。

第２期（6/28-9/25）には**「親と子のワクワク美術館 いきいき！生き物―近代美術館の動物たち」**を開催し、動物や鳥、魚、虫などが描かれた所蔵品を紹介します。

「ダリ版画展」と同時期の第３期（10/4-1/9）には、関連展示として**「幻想世界 シュルレアリスムと美術」**。ヨーロッパのシュルレアリスト（エルンスト、ミロ等）や、彼らから影響を受けた日本人作家（岡本太郎、難波田龍起等）の作品を展示します。同じく第３期には**「雪国をえがく―栖森義・小島丹漾・富岡惣一郎 三人展―」**も開催。自ら創案した白の絵肌「トミオカホワイト」で知られる上越市出身の富岡惣一郎（1922-94）は、今年生誕100年を迎えます。

第４期（1/17-4/9予定）には、美術作家の血縁・師弟関係に焦点をあてる**「命脈」**、日本写真史の黎明期に名を残した新潟市出身の堺時雄（1898-1991）を紹介する**「堺時雄 ピクトリアリズムへの招待」**を開催します。

当館では新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、引き続きマスク着用の上でのご来館をお願いしています。少しずつ日常を取り戻しつつある今、ゆったりと美術作品を楽しむひと時を過ごしてみませんか。

（主任学芸員 長嶋圭哉）

国宝《雲中供養菩薩像 南１号》
1053年 平等院蔵
※後期（5/17-6/5）展示 ©平等院
（「平等院鳳凰堂と浄土院」より）

坂田一男（母子による裸婦）
1924年
（「人体・肉体の表現を見る。」より）

富岡惣一郎〈雪国〉
1971年
（「雪国をえがく」より）

堺時雄〈ソフィア（緑人像正面）〉
1926年
（「堺時雄 ピクトリアリズムへの招待」より）

編集部からのひとこと

新型コロナウイルス感染症の影響で開催延期となり、53号（発行中止）で予定していた三沢厚彦展の特集記事を改めて掲載しました。今年度、当館の所管部署が県教育委員会から知事部局の観光文化スポーツ部に変わり、新たな使命のもと再スタートを切ることになりました。引き続き当館の活動にご支援・ご協力をお願いいたします。

（主任学芸員　長嶋圭哉）

新潟県立近代美術館だより　雪椿通信　第55号
編集・発行　THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
〒940-2083 新潟県長岡市千秋３丁目278-14
TEL0258-28-4111 ㈹　FAX0258-28-4115
https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/
公式ツイッター／インスタグラム　niigata_kinbi
制作・印刷　吉原印刷株式会社
〒940-1164 新潟県長岡市南陽2丁目949-13
リデザイン　長岡造形大学 太田朝陽、畔上祐香、大浦有夏、田中雄大
発　行　日　2022年4月19日

特集1 久保田成子をめぐる2つのトークイベント

昨春に当館で開催し、その後、国立国際美術館、東京都現代美術館に巡回した「Viva Video! 久保田成子展」の関連イベントとして、久保田成子をめぐる2つのトークイベントを3館共催でオンライン開催しました。

第1回は「今なぜ久保田成子なのか」と題して、ニューヨーク近代美術館（MoMA）で同時期に開催されていた「Shigeko Kubota: Liquid Reality」展（2021年8月21日〜2022年2月13日）と日本の巡回展について、双方の企画者が展覧会の意図や構成を説明し、両者のキュレーションの違いを浮き彫りにしました。作家の全体像を紹介した日本展の包括的な視点と、ヴィデオ彫刻の先駆性やオリジナリティ的再評価に焦点を絞ったMoMA展という2つの異なるアプローチの展覧会が同時に開催されたことは、久保田成子の仕事をより深く理解する絶好の機会となったといえます。あわせて久保田成子ヴィデオ・アート財団の活動や使命も紹介し、本展覧会が彼らの献身的な準備作業によって実現したことや、財団の行っている作品調査や修復作業の意義を明らかにしました。

第2回の「久保田成子から読み解く、女性アーティストの過去と現在」では、久保田と同時代に活動し、コラボレーションも行なっていたヴィデオ・アーティストのメアリー・ルシエ氏へのインタビューによって、当時の彼女たちの活動や作品について具体的に紹介。さらに、現代の女性アーティストたち（笠原恵実子氏、小田原のどか氏）からみた久保田作品の意義や影響についてお話しいただいた上で、世代の異なるアーティストとキュレーターによる短いディスカッションを行いました。ルシエ氏のトークの中で印象的だったのは、「久保田はフェミニストではなかったが、女性というアイデンティティを武器として戦っていた」という言葉です。彼女の作品に見られる女性性の強調は、彼女自身の存在を実直に表現した結果なのだと改めて感じました。さらに、彼女たちが結成した「ホワイト ブラック レッド イエロー」は、女性のグループというだけでなく異なる人種によるグループであることが重要だったと語っていたことは、久保田が直面していたアイデンティティの問題に対してアクティブであったことを証言しています。同時期に制作された《ブロークン・ダイアリー：ヴィデオ・ガールズとナヴァホの空のためのヴィデオ・ソング》（1973年）はまさにそうした問題をテーマにした作品で、ナヴァホ族の独特の生活文化を写した映像の上に、時折久保田自身の顔が亡霊のようにあらわれます。この作品について笠原氏は、「主体と客体の間を自由に行ったり来たりすることによって、コロニアルな視点ではない、自己と他者を共存させる表現をとても自然に行っていた」と高く評価されていました。このように多様な人々と久保田作品について意見交換し、新たな共感や解釈を得たことは、企画者の私たちにとっても新鮮で、とても充実した時間となりました。

今回開催された4つの美術館での展覧会と多彩なイベントによって、久保田成子の活動にようやく陽が当たり始めたばかりですが、これを機に今後の調査研究が一層進むことを期待しています。

（万代島美術館主任学芸員　濱田真由美）

「Viva Video! 久保田成子展」オンライントークイベントの記録は下記のURLでご覧いただけます。

Vol.1「今なぜ久保田成子なのか Viva Video! × Liquid Reality」
2021年12月19日 10:30-11:45開催

Vol.2「久保田成子から読み解く、女性アーティストの過去と現在」
2022年1月23日 10:30-12:00開催

特集2 コレクション展「田畑あきら子 火だるまのなかの白い道」を開催して

昨年秋、コレクション展で田畑（はた）あきら子（1940-1969）の特集展示を行いました。当館には、田畑が亡くなって間もなく収蔵された素描約100点と、その後加えられた油彩1点が所蔵されており、これらの作品を一堂にご紹介したものです。田畑の特集展示は、3回目。2回目の前回は、同じく夭折の画家として知られる難波田史男との2人展（2006年度コレクション展第3期）だったので、個展形式としては1996年のコレクション展第3期以来、実に25年ぶりとなる特集展示でした。

当館にある約100点の素描のうち、額装された作品は半数ほど。残りの作品は、制作年等も不明で、これまでほとんど展示の機会がありませんでした。改修工事期間の休館中にこれら未額装の作品の整理が進んだこと、そしてその後の調査で一部の作品ではおおよその制作年も判明したことで、これまでご紹介してきた額装の素描作品とともに、これらの作品も展示することができました。いくつかの作品は、スケッチブックから切り離されたもので、今回、そのもとになるスケッチブックが残っていることがわかったのです。そこから制作年を把握することができました。

さらに、今回ご遺族の協力により、高校時代に描かれた自画像や初期作品も、当館では初めて展示することができました。この出品により、当館の所蔵品だけでは唐突感が否めなかったコラージュの作品が、田畑の一つの関心事であったことがはっきりとしました。油彩画にもよく見ると右下にピンクのビニール片が貼付けられています。田畑の作品には、短い創作活動であっても、表現の変化が顕著に見て取れます。そのなかでもコラージュは、田畑が変わらずに追求した技法であったようです。

3度目となる今回の特集展示では、こうして当館が所蔵する田畑の作品を文字通り「全点」、おおよそ制作順に展示することになりました。タイトルの「火だるまのなかの白い道」は、田畑の詩からとった一節で、その後彼女自身が好きな銘句、信条としても挙げています。田畑の作品が、次第に内省を深め、白い油彩画へと至る「道」を辿っていただくことはできたでしょうか。

最後に、今回の展示にあたっては、油彩画の額装と素描のマット（額装用の台紙）の更新も行いました。近年の評価の高まりから、他館からの借用依頼も増えているなかで、とくに田畑の油彩画は、その技法上の特性から絵具の剥落の心配が尽きません。油彩画にはこれまでも修復が施されてきましたが、画面保護のためのアクリルも追加し、より安全に展示できる環境が整いました。

今回、県内はもとより県外からも問合せをいただきました。コロナ禍での開催でなければ、と悔やまれる部分もありますが、作品の大半を所蔵する美術館の使命として、作品の保護に配慮しながら、今後もみなさんにご覧いただく機会を積極的に設けていきたいと思います。

（万代島美術館主任学芸員　松本奈穂子）

特集3 令和3年度の「出前講座」

コロナ禍によって、私たちの生活も仕事も、大きく様変わりしました。美術館の仕事も同様です。来館者も減っていますが、学校でも来館を見合わせる場合が多くあるようです。来館していただいても、美術館で推奨している対話型鑑賞は自粛せざるをえなくなり、教育普及活動もなかなか思うようにできないのが現状です。

そこで、令和3年度は、県内の小中学校に、当館の「出前講座」について周知し、申請のあった学校に学芸員が出向いて、リモートによる講座も含め、授業を行いました。全県にアピールした甲斐あって、延べ43コマ1,178名の子どもたちに授業を実施しました。

これまで実施してきた学校向け出前講座は、キャリア教育に関するものと、対話型鑑賞による授業が主なものでした。しかし本年度は、学校向け出前講座のために、新たに小学生向けのプログラムを二つ作成し、メニューに加えました。一つは下学年向けのメニュー「“みる”って、楽しい！」、そしてもう一つが上学年向けのメニュー「色や形を楽しもう」です。

〈鑑賞〉といっても、小学生の段階では、その土台をつくる時期でしょう。鑑賞は、ともかく対象をしっかり〈みること〉から始まりますから、まずは、その〈みること〉そのものを楽しむことが重要です。その延長線上で〈感じる・考える・想像する〉ことを織り込んでいきます。そしてもう一つは、ものの見方の間口を広げること。自分とは異なる他人のものの見方・感じ方を、肯定的に楽しめる仕掛けが必要と思います。

そんなわけで、二つのプログラムは、〈楽しむ〉ことを念頭に作成しました。

「“みる”って、楽しい！」では、〈さがす・みつける〉〈まねをする〉をキーワードに作品をしっかり〈みる〉ことで観察力を養います。はじめに野間仁根の油彩画《花園の友人》に描かれている花や虫や鳥を見つけ、さらに二匹一組（カップル）で描かれているものをさがします。そして、例えばネコのカップルは、それがオスかメスかを問いかけるだけで、どのように描かれているかをよくみて考えるきっかけになります。また、〈まねをする〉ためには観察が必要となり、同じポーズや表情をしてみることで、身体で直接作品の気分を味わうことにもつながります。

「色や形を楽しもう」では幾つかの抽象的な作品に自分なりに題名をつけ、その題名から作品を当て合って楽しみます。題名をつけ、その理由を考えることで、色や形の機能に気づくことができます。また他人がつけた題名とその理由を聞くことで、自分とは異なる様々な見方の幅広さに目が開かれることにもなります。

授業後に寄せられた感想文には、「一番たのしかったのは絵の中からいろいろさがすのです。」（3年生）、「絵がこんなに楽しいことがあるんだなと思いました。」（3年生）、「人それぞれ見方がちがって、その絵のよさが、たくさんあることに気がつくことができました。」（5年生）などという記述がみられ、鑑賞を楽しんでもらえた様子や成果が窺えます。

楽しんでくれた子どもたちに感謝しつつ、さらに鑑賞を楽しむ手立てを考えていきたいと思います。

（専門学芸員　宮下東子）

出前講座の様子

野間仁根《花園の友人》1936年

館長所感

2022年2月24日にロシアによるウクライナ侵攻が発生し、世界中でロシアに対する非難や反戦運動が起こりました。我々はテレビ・新聞・ネットを通じて現地の様子を知ることができます。市民が動画を撮影している最中に真上で爆発が起こり慌てて避難する映像、テレビ塔にミサイルが命中して炎上する映像、父親が首都キエフに残り母親と二人で避難する子供が泣きながら歩いている映像など、戦争に巻き込まれる一般市民の姿を目の当たりにして、戦争の苛烈さ悲惨さに心を痛めています。（原稿執筆時点（3月上旬）ではまだロシアのウクライナへの侵攻が続いている状況です）

戦争はしばしば芸術の題材とされてきました。特に戦争を遂行する立場からは戦意高揚を目的として文学、音楽、演劇、そして美術など多くの分野で作品が作られています。

我が国でも戦前には軍隊の出征、戦闘、凱旋などの情景や戦闘での大勝利、兵士の活躍などの場面が「戦争画」として従軍画家などにより描かれました。藤田嗣治、小磯良平、宮本三郎などの有名画家も戦争画を残しています。戦争画は1951年にGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）が接収しアメリカに移送・保管されていましたが、1970年に無期限貸与という形で日本に返還され、現在は東京国立近代美術館に収蔵されています。

一方で一般市民の立場で戦争を描いた作品も多くあります。パブロ・ピカソの《ゲルニカ》や丸木位里・俊による《原爆の図》などがよく知られています。当館の所蔵品でドイツの版画家・彫刻家ケーテ・コルヴィッツの《母と二人の子》というブロンズ像があります。母親が二人の子供を何かから守るように抱きかかえている姿が象られています。ナチス政権下で芸術家としての活動も制限されていたコルヴィッツは、1936年にこの作品をプロイセン芸術アカデミー主催の展覧会に出品を申請しましたが拒絶されています。

ウクライナの地では母親がこのように子供をかばっているのだと想像すると、どのような理由でも戦争はしてはいけないものだとの思いを新たにします。

（館長　遠藤聡）

ケーテ・コルヴィッツ《母と二人の子》1932-36年（1988年鋳造）
コレクション展 第1期（3/29-6/19）の会期中、ロビーに展示します。

表紙の作品
難波田龍起《森の詩》1960年
（コレクション展「幻想世界 シュルレアリスムと美術」（10/4-1/9）より）

戦後日本における抽象絵画の推進者であった作者（1905-97）は、1950年代に「アンフォルメル」の手法を取り入れ、やがて独特の詩情をたたえた抽象表現を確立し、92歳で没するまで旺盛に制作を続けました。この作品では何度も色や線を重ね、紙を貼っている箇所もあります。交錯する線によって画面が無数に分割され、複雑に絡み合った森の生態系や生命の混沌とした様相を象徴的に表現しているようです。森の情景を描写しているわけではありませんが、何となく木漏れ日や葉擦れの音が思い浮かぶ作品です。

（主任学芸員　長嶋圭哉）